

Microsoft Word による卒業論文

理工学部数理情報学科

T980000 池田勉

T980999 中野浩

指導教員 藤本好司

概要

このページには、卒業論文の内容の概要を書く。決して、動機や感想や世の中の情勢を書くのではない。この部分だけで完結するように、問題と結論を書く。

学科の規定で、ちょうど1ページを使い切るような分量とすることになっている。また、このページの裏には何も印刷せず、単独の紙とし、ファイルの最初に綴じる。

概要に関することではないが、ファイルは指定された色を用い、表紙と背に、指定された情報を記す。

なお、年度によって指定される様式は異なる。掲示で確認しよう。

これは、2003年度の特別研究

http://sparrow.math.ryukoku.ac.jp/~hig/course/seniors_2003/

のために、

樋口三郎

<mailto:hig@math.ryukoku.ac.jp>

<http://www.math.ryukoku.ac.jp/~hig/>

が書いた文書である。

最終更新：2003/10/05

2003 年度卒業論文

Microsoft Word による卒業論文

龍谷大学工学部
数理情報学科

T980000 池田勉

T980999 中野浩

指導教員 藤本好司

目次

1	はじめに	1
1.1.	この文書の目的	1
1.2.	はじめにに書かれるべきこと	1
1.3.	引用	1
1.4.	見出しと目次	1
1.5.	整形	1
1.6.	その他	1
1.7.	ページ数	1
1.8.	日本語	2
1.9.	記述のスタイルとレベル	2
1.10.	構成	2
2.	理論	3
2.1.	ここに書かれるべきこと	3
2.2.	数式	3
2.3.	記述の順序	3
3.	アルゴリズム	4
4.	シミュレーションの結果	5
5.	結論と考察	6
	謝辞	7
	参考文献	7
	付録	7

目次は自分で書かずに、挿入>索引と目次で生成する。そのためには、見出しには見出しスタイルを適用し、書式>箇条書きと段落番号>アウトラインで番号を振るように設定しておく。

1 はじめに

1.1. この文書の目的

決して Word を薦めるためではない。LaTeX を使ったほうが楽だろうが、社会人になってからは Word を使うことのほうが多いだろうし、その練習という意味で、Word を使うのにも意味があるのかもしれない。

ファイルを失わないようにしっかり各自の責任でバックアップを取ろう。

1.2. はじめにに書かれるべきこと

自分の扱う問題について、世の中では何がわかっていてどのように認識されているか。なぜ、自分の扱う問題を考えることが必要なのか。

自分の扱う問題についての周辺の知識や、歴史などを書いてよい。個人的動機もちょっとは書いてよい。学部で勉強した何々の理解を深めるため、のような要素があってもよい。

共著の場合は、研究内容を各著者がどのように分担したかについて、序文（はじめに）の中に明記する。執筆の分担でなく、研究の分担であることに注意。

1.3. 引用

1.4. 見出しと目次

章や節の部分は、見出しスタイルに設定する。フォントや文字サイズを直接いじらない。どうしても変更したいときは、新しいスタイルを作る。

番号をふるには、書式 > 箇条書きと段落番号 > アウトラインで適当なものを選ぶ。自分で番号を入力することはしない。

章、節には名前をつける。

1.5. 整形

形を整えるためだけのためのスペースや改行は極力使わない。左寄せ、センタリング、右寄せなどを用いる。

1.6. その他

文字数はツール > カウントで数えられる。スペルチェック、校正機能を使おう。

1.7. ページ数

挿入 > ページ番号で設定。

1.8. 日本語

段落はじめは字下げする。

だ、である体と、ですます体を混ぜない。

主語述語の対応を1文ずつチェックする。

句読点は、。、。、。などどれを使ってもよいが、全体で統一する。

1.9. 記述のスタイルとレベル

新4回生が読んでわかるように。新4回生の知らないような言葉は、定義してから使う。

1.10. 構成

概要、付録を含まずに本文だけで完結すること。

やった順、思い入れの順でなく、読んでわかりよい順に書く。本文の量は、著者1名あたり1万字程度以上であること。図はそれなりに換算する。

しかし、字数稼ぎとおもわれるのがいやだったら付録にまわすとよい。付録は字数にカウントされず、少し余分なことでも好きなだけ書ける。

2. 理論

2.1. ここに書かれるべきこと

プログラムと無関係に、何を計算しようとするのかを、数式を使って書く。

2.2. 数式

数式はすべて数式エディタを用いる。数式、本文中の同じ変数は、同じフォントを使う。

2.3. 記述の順序

普通は、基本的な法則をまず書き、それから導けることを（できれば証明つきで）書く。一般的な場合をまず述べ、個別的、特別なことに進んでいく。

普通は、厳密にいえることをまず述べ、だんだんと信頼性の落ちる近似に進んでいく。

3. アルゴリズム

プログラムのソースを載せるのはあまりよくない。変数名を挙げて説明するよりは、プログラムの構造、考え方を説明する。

また、ルンゲクッタ法など、自分が考案したのではない数値計算アルゴリズムの説明や、グラフィックスの考え方の説明があってもよい。その場合は引用をつける。

4. シミュレーションの結果

図、グラフ、表はそれだけでは記述でない。本文で 図 1 のように のように言及する。

図番号は挿入>図表番号で入れる。

文を回り込ませたいときは、右クリックメニューの書式設定>レイアウトでいけるはず。

図のつもりです

図 1 図のサンプル

5. 結論と考察

自分でやったことと人がやったことを区別する。人がやったことについては文献を引用する。

証明できることと予測を分けて書く。

謝辞

謝辞でも文体は変化しない。

参考文献

1. 戸田盛和、力学、岩波書店、1982 .
2. 木下宙、天体と軌道の力学、東京大学出版会、1998.
3. ハンドルネーム、<http://www.somewhere>, 2003 .

書式 > 箇条書きと段落番号で箇条書きにする。順序は、出てきた順または著者の 50 音順。URL, 過去の卒業論文なども引用する。文献には、著者名、署名、出版社、出版年。Web の場合も URL などで引用する。

文献には番号を付け、本文で引用する。引用されない文献は載せない。全体に参考にしたものは、はじめに、などで引用する。

付録

付録は書きたい放題で、プログラムのソースなどもつけてもよい。実行結果のスクリーンショットなども付録に入れるとよい。